

◆平成28年度新指定文化財◆

和倉橋親柱 2基
富賀岡八幡宮大幟 三井親和書

江東区教育委員会は、文化財保護審議会(会長 北原 進：立正大学名誉教授)の答申を受け、新たに2件を指定し、1件を登録しました。また、1件を解除したため、登録文化財の総数は1058件となりました。

南詰親柱



北詰親柱



KOTO City in TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区

NO.

277

2017.4.26

発行

江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.
lg.jp/

- 平成28年度
新指定・登録文化財紹介
- 河上一雄先生訃報
- 所蔵資料紹介
明治四十四年七月二十六日の
水害絵葉書
- 平成29年度芭蕉記念館特別展
「句碑にたどる江戸・江東の俳諧」
- 江戸の獵師町を探る
深川獵師町ってどんな町？2
- 旧大石家住宅の茅葺替え工事
- 新刊案内
「絵葉書で見る江東百景
深川公園－富岡八幡宮・深川不動堂－」

静かに語りかける文化財

文化財は、過ぎ去った日々、地域の人々が生活・生産・信仰などさまざまな活動を通して生み出してきたものです。材質も木・石・金属などとさまざまですが、そこには地域やそこに住んだ人々の歴史が刻み込まれており、その姿を見るとき、私たちに静かに語りかけているように思えます。

このような文化財を後世に伝えるため、文化財係では、現代に受け継がれ

た遺産を文化財として指定・登録しています。そのために、計測や刻銘の筆写など、できるだけ詳細な調査を行い、少しでも多くの情報を読み取るよう努めています。昨年度は、新たに2件を指定、1件を登録しました。

文化財というと少し堅苦しいイメージをもつ方も多いのではないのでしょうか。でも、決してそのようなことはありません。意外と身近なもので、皆さんの近くにも数十年、あるいは数百年と長い時を経過しつつも、地域に受け継がれ、残されてきたものがきつとあるはずですよ。

これから春に向い、陽気も良くなってきましたので、ぜひ近所の路地など散歩してみたいかがですか。きっと新しい発見があると思いますよ。

新文化財については、その詳細について次頁で紹介していますので、ぜひご覧ください。

河上一雄先生逝く

本区文化財保護審議会副会長の河上一雄先生は、入院加療中のところ、治療の甲斐なく去る1月13日にご逝去されました。75歳でした。

先生のご尽力に対し感謝申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(次頁に関連記事)

略歴

1941年 東京生まれ

1967年3月

東京教育大学大学院修士課程修了

※専攻は日本民俗学

修了後、都立高等学校に勤務

2001年3月 定年退職

2013年9月

江東区文化財保護審議会委員

2016年4月

江東区文化財保護審議会副会長

指定文化財

【有形文化財（建造物）】

和倉橋親柱 2基

富岡1―17 江東区

和倉橋は、関東大震災からの復興事業の一環として油堀川に架けられた震災復興橋梁の一つで昭和4年に竣工しました。親柱は、その両端にある柱をいいます。その後、昭和50年に川が埋め立てられると、橋は撤去され、親柱（2基）だけが残されました。現在は、高速9号深川線の高架下の通路を挟んで南北に置かれています。

両親柱の構造は、上中下の三段からなる本体と台石で構成され（写真参照）、いずれも花崗岩（かこうがん）でできています。

河上先生は、都立高等学校教諭の道を歩まれ、日比谷高等学校校長を最後に定年退職されました。その間、区内東砂の東高等学校へも勤務されました。

江東区文化財保護審議会の委員は3年余でしたが、昨年4月からは副会長を務められました。審議会では、専門の民俗学だけでなく、他の分野でも貴重なご意見をいただくなど、当区の文化財保護にご尽力いただきました。本当にありがとうございます。

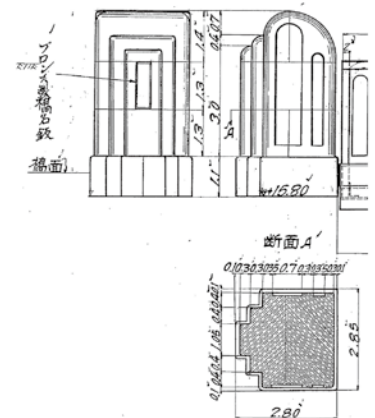


モルタルの接合部

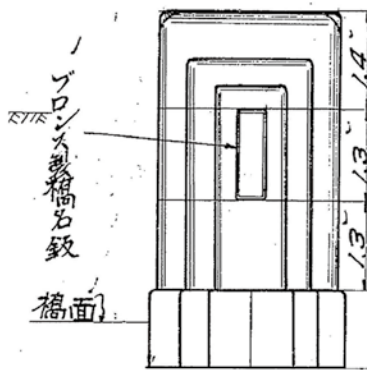
錆・鉄製）がはめられています。

ちなみにこの橋名板は、竣工図面である「和倉橋 一般構造図並装飾図」（江東区指定有形文化財（歴史資料）「震災復興橋梁図面 901枚」所収）にはブロンズ製と記されています。しかし現在の橋名板は鉄製で、青色の塗料

積み重ねられた各部材は、モルタルで接合されており、正面に「わくらばし」と記された橋名板（陽



一般構造図並装飾図（部分）



右図一部拡大

（大部分が剥落）が塗られていたことが、検査の結果わかりました。



橋名板(右:北詰 左:南詰)

また、もう一つの特徴として、左右側面から見られる放物曲線状のデザインがあげられます。これは近代的な建

築様式、特に表現主義の影響を受けているものと考えられます。このような親柱は、震災復興橋梁の中では全体的に少ないことから、貴重な事例となります。

このように本親柱は、位置・形態に変化がみられるとはいえ、失われつつある震災復興橋梁の面影を現在へ伝え、さらに表現主義のデザインを知ることができる貴重な文化財です。

【有形文化財（歴史資料）】

富賀岡八幡宮大幟 三井親和書

南砂7―14―18 富賀岡八幡宮

富賀岡八幡宮大幟は、安永8年（1779）に書家の三井親和が作製し、富賀岡八幡宮氏子中によって同宮に奉納されたものと考えられます。製作年代が記されていたと思われる上部右の部位が欠損していますが、残存している墨書の「八十歳 三井親和書」から親和が80才の時に書いたものとわかります。神社名の部分は、親和が得意とした篆書体で書かれています。



砂村氏子中

八十歳 井親和 書



親和は、当時、著名だった細井広沢に師事し、広沢門下の四天王と称されました。深川油堀（現福住付近）に住したことから「深川親和」とも称しました。

親和の書は、「型破りな幅広さ」・「ためらうことなく運ばれる筆」を持ち味として庶民に受け入れられた一方、優美さに欠け、通俗的と批判もされました。しかし、現存はしていませんが、江戸時代の浮世絵に神田祭・山王祭などの江戸祭礼で親和書の大幟が使用されていた様子が描かれており、親和の書が江戸町人に広く受け入れられていたことがわかります。

現存する親和書の大幟は、長野県に3件・個人所蔵で1件あります。しかし、都内で親和書の大幟が現存している事例は、現在のところ富賀岡八幡宮大幟を除いてありません。そもそも現存する江戸時代の奉納幟自体が希少であるなか、本大幟の学術的価値は高いです。また、砂村新田の鎮守富賀岡八幡宮に奉納され、保管されてきたという江東区の地域性を色濃く反映していることから江東区にとって重要な文化財といえます。

登録文化財

【有形文化財（建造物）】

石造燈籠 板倉重形奉納寛永寺旧蔵

新木場2-1-8

東京木材市場株式会社板倉重形が、四代将軍徳川家綱の追善のために延宝9年（1681）5月に寛永寺へ奉納した石造燈籠です。

後に、東京木材市場株式会社社長的美谷島英一氏がこの燈籠を購入しました。同社は、大正8年（1919）に設立され、本社を深川木場4丁目に置きましたが、昭和51年（1976）に新木場へ移転しました。燈籠と一緒に設置されたと考えられる説明板には、昭和53年9月の日付があります。美谷島氏は同年5月には東京原木協同組合に石造燈籠を寄贈するなど、江東区域の会社経営者の活動の一端をうかがえます。欠損箇所もみられますが、石造燈籠としての基本的な構造を有しています。



石造燈籠

指定解除

【無形文化財（工芸技術）】

石工 保持者 新川 昇

所在地変更

【史跡】

霊雲院跡

清澄1-4・5・6・7付近、
同2-5・9・10・11付近

文化財説明板の紹介

文化財係では、江東区登録史跡や江東区指定文化財の所在地に文化財説明板を設置し、ゆかりの歴史や文化などを紹介しています。平成28年度は2基の史跡説明板を新たに設置しました。

一つは「東京市立深川図書館跡」です。東京市立深川図書館は、明治42年（1909）に二番目の東京市立図書館として深川公園内に創立された図書館で、現在の江東区立深川図書館の前身にあたります。当時の深川公園内の南西に立地していたこ



東京市立深川図書館跡

とにちなんで、現在の深川公園（富岡1-14-10）の南西角に説明板を設置しました。もう一つは「採

瓢池園陶磁器工場跡

森下3-5、3-13、4-24・25

名称および所在地変更

【史跡】

旧万年橋跡

常盤1-2、清澄1-8

茶庵跡」です。採茶庵は、江戸時代中期の俳人杉山杉風の庵室です。杉風は松尾芭蕉の門人であり、蕉門十哲に数えられた人物です。奥の細道の旅に出る前、芭蕉庵を手放した芭蕉は、しばらく採茶庵で過ごし、千住大橋から奥州へと旅立ちました。説明板は、海辺橋の南西側橋台地、芭蕉像と採茶庵跡標柱の隣に設置しました。



採茶庵跡

なお、外国の方にも読んでいただけるように、英語の説明文も併記しています。文化財係ではこれからも文化財説明板を設置していく予定ですので、散策の際などにご覧ください。

所蔵資料紹介

「明治四十四年七月二十六日の水害絵葉書」

今回、紹介する2つの絵葉書は、明治44年（1911）7月26日に東京を襲った暴風雨で被害を受けた江東区域の水害を記録したもので、越中島の沿岸部で船舶が陸上に打ち上げられた様子を伝えています。

16の「二十四号艇」という船とわかります。船体にも「第二十四」という文字がみえます。

また、この情報をふまえて、改めて資

料①の「（明）治四十四年七月廿六日 海嘯 越中島二水雷ヲ打上ケル」と題された絵葉書は、遠景で船の全体を写しており、巨大な船体が道路や敷地をさえぎっている状況や、場所が越中島で船は「水雷」という船種であることがわかります。しかし、具体的な船名や所属はわかりません。

その不足した情報を補うのが資料②の絵葉書「明治四十四年七月二十六日大暴風雨大惨事 月島商船学校二十四号艇」です。タイトルから商船学校（現在の東京海洋大学、越中島2-1

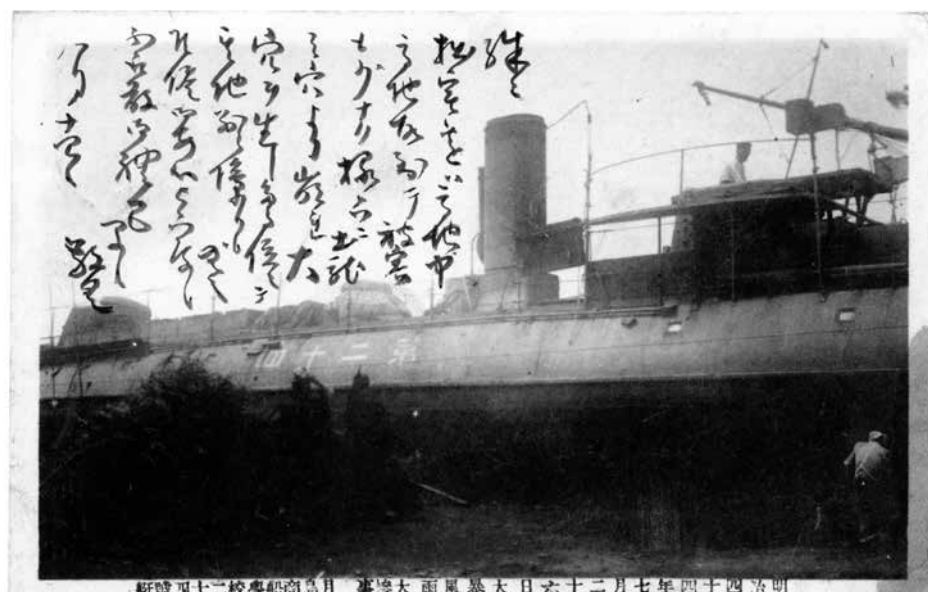


資料①「（明）治四十四年七月廿六日 海嘯 越中島二水雷ヲ打上ケル」

料①をみると、船体後方に見える建物が、その形状から商船学校の気象台とわかり、この場所が商船学校の敷地であると推測できます。

実は打ち上げられたこの船は、明治28年に呉（広島県）の造船所で建造された旧日本海軍の第二一号型（ノルマン型）水雷艇の第二十四号艇という軍用艦船で、明治44年4月に退役した後、商船学校に練習船として移管されました。

しかし、商船学校は、商船の船員を養成するための官立学校です。その商船学校でなぜ軍用艦船を必要としたのか少し不思議に思われます。しかし、当時は軍備拡張という国策のもと、海軍の人員強化が求められており、船舶を運航できるという特殊な技術を持つ商船学校の生徒は身分上、海軍の軍人とされ、卒業後も海軍士官の予備員という地位を与えられました。また、学校のカリキュラムにも軍事教練が含まれていました。「二十四号艇」の具体的な運用法は不明ですが、そうした事情から授業の一環として軍用艦船を



資料②「明治四十四年七月二十六日大暴風雨大惨事 月島商船学校二十四号艇」

利用していたのかもしれませんが。

江東区域は土地が低く、戦前は排水設備なども十分ではなかったため、大雨や高潮、津波などの水害が起こると大きな被害が出ました。その巨大な水の力は、時には「水雷艇」という思いがけないもので陸の上に押し上げてしまったのです。

（文化財専門員 斉藤照徳）

「句碑にたどる江戸・江東の俳諧」

平成29年4月27日(木)～6月11日(日)

深川を拠点とした芭蕉が亡くなった後、門弟の嵐雪(雪門)や其角(江戸座・其角堂)の系譜を引く俳人たちを中心に、江戸やその周辺で多くの俳諧結社がつくられました。特に現在の江東区域には、彼らが建立した句碑が各地に残されており、江戸・東京における俳諧の広がりを見ることが出来ます。

今回の特別展では、現在の江東区域に残る句碑と、それに関連する作品を取り上げ、江戸時代中期から昭和初期までの俳諧結社の活動について見ていきます。

太白堂(芭蕉記念館庭園)

芭蕉の二五〇回忌にあたる昭和18年(1943)に、太白堂十世の日比野桃月(1875～1957)が芭蕉庵跡に再建した芭蕉堂です。この祠は大正12年(1923)の関東震災で焼失したため石造りとされ、昭和20年の東京大空襲



写真①

跡に再建した芭蕉堂です。この祠は大正12年(1923)の関東震災で焼失したため石造りとされ、昭和20年の東京大空襲

では被害を免れました。現在は芭蕉記念館の庭園にある築山に移されています。(写真①)

芭蕉翁句塚跡(長慶寺)

芭蕉の没後、門弟の杉風・其角・嵐雪・史邦らが建てた芭蕉の塚です。塚の上には「芭蕉翁桃青居士」の碑があり、後に其角や嵐雪などの墓も建てられましたが、大正12年の関東大震災と昭和20年の東京大空襲で破損しました。(写真②)



写真②

園女歌仙桜碑(深川公園)

芭蕉門下の女性俳人・度会園女(1664～1726)が、正徳年間(1711～16)頃に富岡八幡宮の境内に36株の桜を植え、園女桜・歌仙桜と称されました。その後、永代寺の門前に住んでいた園という女性歌



写真③

人が宝暦5年(1755)に桜を奉納し、この碑を建立したとされます。(写真③)

園女歌仙桜之碑(深川公園)

昭和6年(1931)、園女の歌仙桜にちなんで36本の桜を植えた際に建てられた石碑です。洪沢栄一の揮毫による題字と、有志の俳句三十六首が刻されています。(写真④)



写真④

花本社(富岡八幡宮)

芭蕉を祭神とする富岡八幡宮の末社で、現在は祖霊社に合祀されています。花本社は寛政年間(1789～1801)に当時の俳人有志により建立されたもので、天保14年(1843)の芭蕉一五〇年忌に二条家から「花本大明神」の称号が贈られました。(写真⑤)



写真⑤

玄武仏碑(臨川寺)

美濃派の俳人・神谷玄武坊(1713～98)を祀った石碑です。玄武坊が小石川(文京区)の白山門前に住んだため、門



写真⑥

人たちは「白山下連中」と称しました。横にある「墨直しの碑」は、各務支考(1665～1731)が京都の双林寺に建てた墨蹟を玄武坊が写して臨川寺に建てたもので、保存のため現在は本堂内に安置され、かわりに二代目の石碑が建てられています。(写真⑥)

女木塚跡(大島稻荷神社)

葛飾派の系譜を引く其日庵社中が建てた句碑です。碑文は元禄5年(1692)、芭蕉が50歳の時に小名木川の船中において詠んだ句で、もとは愛宕神社(大島5丁目)にありましたが、後に第二大島小学校に移され、さらに現在地に移転しました。(写真⑦)



写真⑦

また、5月27日(土)の午後2時から、職員による展示解説(ミュージアムトーク)を行いますので、この機会にぜひご来館ください。

【芭蕉記念館 問合せ】

☎ 03(3631) 1448

江戸の獵師町を探る

ふかがわりようしまち

深川獵師町ってどんな町？2

前号では、獵師町の成立時期や背景などを中心に、『寛永録』（東京都公文書館所蔵）の記述からご紹介しました。深川獵師町は、隅田川沿いに北から清住・佐賀・相川・熊井・諸・富吉・黒江・大島の八ヶ町で構成され、江戸時代中期の正徳3年（1713）に江戸に編入され、町奉行支配に変わりました。江戸近郊の他の獵師町では、佃島（中央区）が成立当初から江戸の一部で、芝金杉・本芝（いずれも港区）の両獵師町もすでに寛文2年（1662）に町奉行支配になっていましたので、江戸には複数の獵師町が存在したことになります。深川獵師町を通して、獵師町がどのような町で、一般漁村とどう違ったのか、前号の続きをお話いたします。

1、獵師町と流通

まず、前号の最後で触れた深川獵師町の流通についてお話ししましょう。

獵師町といえば、一般的には獵師が住んでいる場所と考えますが、深川獵師町は、漁業以外に流通にも関わっていました。そのはじめりは明確ではありませんが、遅くとも江戸時代の前期（17世紀中ごろ）と考えられます。寛文10年（1670）の検地（土地調査）の時には、隅田川沿いで荷物の積み下ろしをする河岸地を調査対象から除いていますので、河岸がそれ以前から存在したことは間違いありません。この付近は、江戸経済の中心であった日本橋に、隅田川と内部河川で結ばれていたため、河川流通には好都合な場所

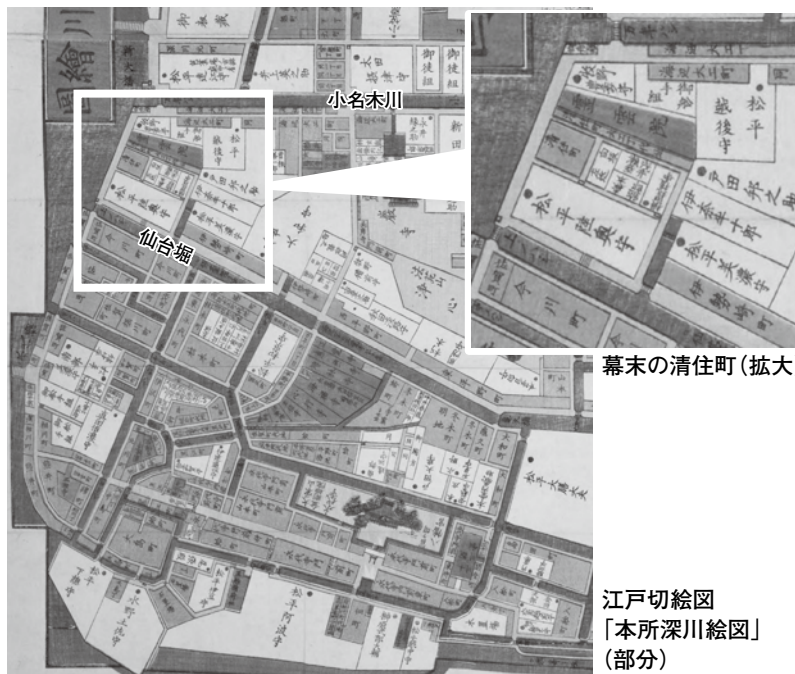
あったといえます。

また、深川獵師町には、藩や旗本の屋敷・蔵屋敷が多く存在し、河岸も備わっていました。河川・堀割に囲まれたこの地は、物資保管に適した場所であったことから、蔵屋敷やその機能を備えた屋敷を設けたと思われます。佐賀町にあった仙台藩の松平（伊達）陸奥守蔵屋敷は、その代表的存在といえるでしょう。この蔵屋敷は、仙台堀と隅田川が合流する地点の北側に位置し、その名が仙台堀の由来になったともいわれています。

このように、深川獵師町は、大名屋敷・寺社の成立・町人地の形成と、開発が進むに従って、その姿を変えていきました。

2、獵師町の古い姿

ここでは、現在確認できるものも古い時代の姿を追ってみたいと思います。残念ながら開発当初のものはありませんが、延宝9年（1681）の弥兵衛町（のち清住町に改名）の姿を描いた絵図が残されています。同町は、獵師町の最北に位置し、小名木川が隅田川と合流する地点の南に位置しました。現在の清澄1〜3丁目付近です。この地域を幕末の江戸切絵図「本所深川絵図」で見ると、ほとんどの土



江戸切絵図「本所深川絵図」(部分)

地を武家屋敷と寺院が占め、町人の居住地は、かなり狭い範囲に限られています。これが、寛永6年（1629）の開発から230年ほど経過した深川獵師町のうち、清住町の様子です。

これに対して、その180年ほど以前、延宝9年（1681）の「深川獵師町弥兵衛町図」（江東区深川江戸資料館所蔵）には、開発から52年後の町の様子が描かれています（左頁の図参照）。その

姿を見ると、幕末とは大きく異なっています。町地は18筆に分割され、榊原式部大輔（越後国村上藩主―新潟県）屋敷が9筆、杉浦内蔵允（旗本）蔵屋敷が1筆、成瀬隼人正（尾張藩付家老―愛知県）蔵屋敷が1筆、伊奈半十郎（幕府代官）蔵屋敷が1筆、「江戸町人」持ちが1筆、開発当初からと思われる家主が4筆、所有者不明の土地が1筆で、そのいずれにも往来を挟んで河岸地が付属していました。

このように、延宝〜幕末に至る



〔深川彌師町弥兵衛町図〕

180年間に町は大きく変貌へんぼうしました。そして、彌師など浜の関係者の居住地も、彌師町の南部地域（永代・福住・富岡付近）が中心になります。

3、幕府への勤め

彌師町が一般漁村と大きく異なる点は、さまざまな海上役（船を使った労働力の提供）を負担していることです。これは、深川だけでなく、他の彌師町も同様です。将軍が御座船で出かける時、荷物を運搬したり、江戸前の海でとれた魚介類ぎょかいりいを江戸城に納めるなど、その内容は多岐にわたりました。

深川彌師町で興味深いものに、明暦3年（1657）に起こった大火に関わる負担があります。この火事は、江戸の大半を焼きつくしましたが、水路が発達した江戸では多くの橋も焼失しました。その結果、都市機能は大幅に低下し、武士が江戸城へ登城することもかなわなかった状況に陥ったのです。その時、深川と芝金杉（港区芝1・2付近）の両彌師町が銭瓶橋ぜにがめばしと一石橋いっしきばしに船を出し、登城の役人を渡しました。このことについて、『寛永録式』（東京都公文書館蔵）には、次のように記されています。

明暦三百年江戸大火、橋々焼失の刻、銭瓶橋・一石橋両所へ御役船附置、



（拡大）

江戸切絵図「内桜田之図」
（国立国会図書館デジタルコレクション）

御登城の御役人方渡越相動：

銭瓶橋と一石橋は、現在のJR東京駅や北東側に位置しましたが、このとき深川と芝金杉の両彌師町が船と人を出したのは何故か？江戸市中に近しいという指摘はできますが、他の彌師町の働きを含め、それ以上のことはわかりません。江戸城の東部（主として町人地）に張り巡らされた河川・堀割は、物資の輸送に欠かせない半面、火災や水害で橋を失うと人の流れが寸断され

ることもまた事実でした。それだけに、明暦の大火後、両彌師町が果たした渡船の役割は、登城を助け、幕府政治の停滞を最小限に防ぐうえで、極めて重要であったといえます。

4、浜十三町の形成

先に、深川地域の変貌とともに、彌師など浜の関係者の居住地は、彌師町の南部付近が中心になったと記しましたが、この地域を地元では「浜十三町」と呼びました。彌師町の相川町・熊井町・黒江町・大島町に、彌師町ではない周辺の中島町、蛤町はまごりょうなどが加わり、13の町で構成されていたのです。もちろん、彌師町八ヶ町は幕府崩壊まで存続しますが、北部の清住町・佐賀町の漁業との関わりは希薄きはくになり、反面、海に近い浜十三町は深川の漁業を担います。明治になると、大島町が上・下に分かれ浜十四町となり、深川漁業組合加入の居住範囲にもなりました。

以上、深川彌師町について、2回にわたってお話いたしました。江戸にも彌師がいたこと、彌師町は幕府の御用にも貢献したこと、そしてその彌師が江戸前の海で獲った魚介類が江戸・東京の食文化の一端を支えたことを指摘し、まとめに代えたいと思います。

（文化財主任専門員 出口宏幸）

旧大石家住宅の 茅葺替え工事



初めての葺替え

仙台堀川公園内にある旧大石家住宅は、江東区内では最古の茅葺屋根を有する民家建築です。言い伝えなどによると、建てられたのは江戸時代の終わり頃、今から160年以上前と考えられます。もとは東砂8丁目に建っていました。平成8年に現在地に移築復元されました。このたび、築後20年が経過したことで、初めて茅葺屋根の葺替え工事を実施しました。

使用した材料

茅葺とは、ヨシやスキなどを使って葺いた屋根のことをいいます。平成8年の移築復元時は、栃木県の渡良瀬遊水地のヨシを使用しました。今回は宮城県から職人を呼んで作業を行うこともあり、同県の北上川沿いに生育し

ていたヨシを使用しました。使用する量は約40立方メートル（約2千束）で、トラックで2回に分けて搬入しました。

工事概要

今回は平葺（丸葺工法）で行いました。屋根の茅をすべて撤去して新しい茅に葺替えるのではなく、損傷の激しい茅は葺替え、古い茅でも状態の悪くないものはそのまま使用する工法です。古民家の周囲に足場を建設し、工事が始まりました。



軒付け

最初に既存の茅を抜き取ります。屋根表面の茅の損傷が激しくても、下地の茅が傷んでいなければ、下地の茅はそのまま使用します。次に軒付けを行います。1段毎に押鉾竹（茅を押さえる竹）で押さえて所定の厚さになるように茅を積み上げます。なお、屋根上で葺替えに使用する茅は、職人が下から茅の束を放り投げて、上にいる職人がそれを受け取ります。

軒廻りを葺いたら、次は平葺です。隅から葺き始め、要所を押鉾竹で押さ



平葺

えながら、下から上へ段々茅を葺いていきます。上部を葺く時は丸太を足場にします。次に棟造りを

行います。屋根の一番上の部分が「棟」です。相互の茅を編み込んで縄で締め固めて形状を整えます。最後に外観を確認しながら凹凸ができないように叩き込み、鋳で刈り込んで仕上げます。工事は平成29年1月30日から始まり、3月3日に終了しました。



棟造り

茅の葺替えのほかに、畳を入れ替え、屋内の照明器具を蛍光灯からLED照明に取り替えました。きれいになった旧大石家住宅を

是非ご覧ください。

住所 所 南砂5-24地先

仙台堀川公園内

開館日 土曜日・日曜日・祝日

開館時間 午前10時から午後4時

（文化財専門員 金井貴司）

新刊案内

『絵葉書で見る江東百景』

深川公園―富岡八幡宮・深川不動堂―

江東区は、大正12年の関東大震災、昭和20年の東京大空襲によって街並みが大きく変化してきました。移り変わる景観を知る資料の一つとして写真があります。江東区が所蔵する写真資料は戦後に撮られたものがほとんどで、戦前のものはわずかです。そのため江東区教育委員会では、近代の江東区の名所や街並みなどの写真を使用した戦前発行の絵葉書を収集しています。本書は、収集した絵葉書を通して江東区の近代の景観を知っていただくことを目的として刊行するものです。今回は深川公園を取り上げ、公園や園内の深川不動堂・富岡八幡宮および同宮の祭祀に関する絵葉書をご紹介します。



【規格】 A4判、16頁、フルカラー
【価格】 500円